さあ、大学だ！勉強だ！

本学若手教員からのアドバイス ❶

経済学はこう学べ

自己責任で選択する自らの道

中野 正裕

大学は、創造的な研究と知識の蓄積を行う場所であり、そのため全般的に「自由な雰囲気」を重んじている。また、大学生は年齢的にも「オトナ」として扱われ、やるべきことは自分で責任をもって選択するという、いわゆる「自己責任」が強く求められる。

大学の「自由な雰囲気」に打ち解けたころ「自己責任」の重さを最初に強く感じるのが、履修科目と所属学科の選択である。経済学または経営学という柱に沿って体系的に学習するために、まずどんな事に気をつけたらよいだろうか。私なりにいくつかのポイントをまとめたいと思う。

◆自分の「興味」「関心」は自分だけのもの。それを大切にすること。安易に人のマネをしない

経済学部では、二年次進級時に所属学科（経済学科 or 経営学科）を自主的に選択しなければならない。ここでしっかりした目的意識をもっていないと、のちのち後悔することになる。

社会を「見る眼」を養ううえで、経済学と経営学は大きく異なるアプローチをとるが、どちらが優れているといったことはいえない。社会に対する自分の関心、興味を突き詰めていく際、経済学・経営学のどちらを柱にするのが自分に「合っている」かを見極めることが大切である。「友達が選ぶから」などという理由で履修科目や所属学科を安易に選択していては、いつまでもオトナになれないのである。

◆積極的に「情報」を集める

経済学と経営学のアプローチがどう違うのか、どちらが自分に合っているのかが分からなければ判断のしようがない。一年次ではまだ専門科目の多くを履修することができないが、だからといって何もしない訳にはいかない。あたり

まえの話だが、経済学・経営学の入門書を数冊読み、また専門科目の基礎となる講義（例えば経済学では「経済原論」や「基礎ミクロ経済学」・「基礎マクロ経済学」など）を聴き、先生の研究室を訪ねるなどしてできるだけ多くの情報を集めなければならない。ただし、あまりに多くの情報を一気に集めると消化不良を起こすので、履修単位なども考慮に入れながら、バランスよく学習してほしい。

◆人に伝えるためには論理性・説得力が必要。経済学の技術はそれを助ける

逆説的に聞こえるかもしれないが、経済社会に対する自分のオリジナルな問題意識を発展させ、独創的な思考を価値あるものにするために、自分の考えができるだけ多くの人に理解される形で表現できなければならない。他者を説得できない議論は、自分にとってどんなに意義のあるものであっても独善的にすぎず、その価値は認めてもらえない。

「市場」をモデル化する経済学のアプローチではしばしば数学が用いられる。これは経済学者に数学好きが多いからではなく、議論が論理的矛盾に陥るのを防ぐうえで数学を用いるのが便利な場合があるからだ。「経済学は数学を用いるから難しくてニガテだ…」と感じる学生は多いが、食わず嫌いはよくない。まずは経済学で扱う抽象化の世界に触れてみよう。

◆経済学は社会を「見る眼」を養うもの。講義や書物を通じて学んだことが社会をどう「見る」のに役立つか、絶えず社会を見る姿勢をもつ

経済学を学習する目的は社会を「見る眼」を養うことにあり、実際に社会の動きを見なければそれがよい「眼」かどうか分からない。現実の社会に絶えず注意を向け、どう考えればよいか自分なりに疑問をもつことが大事である。新聞、ニュースに眼を通し、社会の出来事や経済問題について感じたことを自分の言葉で他者にどう説明できるか考えよう。きっと自分が習ってきた経済学の抽象的な議論だけでは納得のいかない点が浮かんでくるだろう。あなたの個性的な感覚や独創性な思考はそこから磨かれてゆくのである。四年間かけて価値ある「見る眼」を磨いてほしい。

中野 正裕（なかの　まさひろ）

経済学部講師。
1969年生まれ。熊本県出身。2000年神戸商科大学経済学研究科博士後期課程修了。同年から現職。主要な研究テーマは経済変動の分析。とくに設備投資変動と貨幣・金融市場のつながりを中心に研究している。
[URL]http://www1.tcue.ac.jp/home1/mnakano/index.html